

ディズニー長編アニメ映画『ラーヤと龍の王国』を映画『メコン2030』との関連性から読み解く

橋本 彩

『ラーヤと龍の王国』(Raya and the Last Dragon) (107分)は、東南アジアを舞台とした初のディズニー長編アニメ映画として、2021年3月5日(ラオスでは3月4日)¹⁾に公開された。この映画はもともと2020年11月25日に公開予定であったが、世界的な新型コロナウイルス感染症の拡大により約4か月公開が延期された[Shepherd 2021]。そもそもの公開予定日が、米国がメコン5か国(ベトナム、カンボジア、ラオス、タイ、ミャンマー)とメコン・米国パートナーシップ(Mekong-U.S. Partnership)を締結した2020年9月11日を見据えたかのようなタイミングに設定されていたのはただの偶然なのだろうか。本稿では、少しのずれはあるものの、ほぼ同時期に製作されたメコン川を主題とする映画『メコン2030』と本ディズニー作品に何らかの繋がりが見出せるのかどうか、その関連性について、昨年執筆した論稿「父の不在、母なるメコン、そして兄・弟・姉——アニサイ・ケオラ監督The Che Brotherをめぐる」(山本博之編著『CIRAS Discussion Paper No.100 越境する災い——混成アジア映画研究2020』)を踏まえて考察していきたい。読者の方には上記論稿を事前にご一読頂いてから本稿を読み進めて頂ければ幸いである。

『ラーヤと龍の王国』あらすじ

500年前のクマンドラはかつて人間と龍が平和に暮らす理想郷だった。そこに煙の怪物ドルーンが現れ、人や龍を石に変えてしまう。兄弟姉妹がそれぞれの魔力を注ぎ込んだ玉を託された最後の龍シスは、自らの力もその玉に吹き込むことでドルーンを封じ込め、人々を救った。しかし人々は石から甦ったものの、龍は戻らなかった。残された人々は世界を救った

龍に感謝し、龍の玉を崇めたが、次第にその龍の玉を巡って争うようになった。その結果、一つの川で結ばれていたクマンドラは上流のファンク(牙)、中流域のハート(心臓)、スパイン(背骨)、タロン(爪)、下流のテール(尾)の5か国に分裂してしまう。龍の玉を守る役目を担ってきたハート国の首長は再び理想郷クマンドラを甦らせるため、他の4か国から人々をハート国へ招き、和解しようとした。しかしながら、集められた人々は大切に守られてきた龍の魔力を持つ玉を巡って再び争い、玉もクマンドラ復活の願いも砕いてしまう。ドルーンを封じ込めていた玉が割れるとドルーンは復活し、人々を石に変えていく。ハート国首長の娘ラーヤは石に変えられてしまった唯一の肉親である父を甦らせるため、最後の龍シスが川の下流のどこかで眠るとの伝説を信じて、シスを探す旅に出かける。6年をかけてたどり着いたテール国の支流でラーヤはシスとようやく出会うが、割れた玉の欠片だけではシスをもってしてもドルーンを封じ込めて、人々を石から甦らせることはできなかった。そこで2人はすべての欠片を集めるために5つの国を巡る旅に出る。幼少のラーヤを人間不信に陥らせた張本人であるファンク国首長の娘ナマーリがラーヤとシスの行く手を幾度となく阻むが、2人はそれに立ち向かいながら進んでいく。ドルーンを封じ込め、石になった龍や人々を救済するために真に必要なものとは何なのか。旅を通して大切なものを探していく冒険物語である。

舞台となる理想郷クマンドラ(Kumandra)

脚本家である中国系マレーシア人アデル・リム(Adele Lim)²⁾、ベトナム系アメリカ人であるキューイ・
2)すべてのキャストがアジア系で構成された初のハリウッド映画として話題となった2018年公開『クレイジー・リッチ』の脚本家の一人。

1) ブーン役の声優アイザック・ワン(Izzac Wang)は母親がラオス人であったため、ラオスでも公開前より注目されていた。

グエン (Qui Nguyen) は、両者ともに、クマンドラは東南アジアに着想を得た全くの空想世界だと述べている。しかし、クマンドラの地図においては、5つに分裂した国が一体の龍の形をした川で繋がっていて、東南アジア地域を見渡してみても、1つの川によってつながっている5つの国は大陸部メコン川流域国しか見当たらないことから、特定の国を想定していません。状況的にはメコン川流域国を想起させる。

実際、2021年5月21日にウォルト・ディズニー・ジャパンより発売された『ラーヤと龍の王国』Blu-ray に収録されていたボーナス・トラック内の「クマンドラを造る」と題する映像内において、ラーヤの制作にあたってディズニーが協力を仰いだ東南アジア・ストーリー・トラスト (Southeast Asia Story Trust)³⁾ 文化顧問ジェス・ヴ (Jes Vu) が「水は命の源です。本作の世界観というだけではなく、実世界でも同じ。東南アジアを流れるメコン川は貿易の拠点であり、大勢が住む場所でもある。川に何かあれば、川を利用する人々にも影響が出てしまう。その川に着想を得て、本作でも5つの地を川が結んでいる。クマンドラは川を中心につながっている」と述べている事からも、クマンドラそのものの着想がメコン川流域国の存在に基づいていることは明らかである。

共同監督ならびにストーリー制作者の1人でもあるポール・ブリッグス (Paul Briggs) も、ボーナス・トラック内「ラーヤの世界を味わう」において、ラーヤ制作にあたり制作チームで東南アジア諸国へ調査旅行⁴⁾ へ出かけた際のことに言及し、「メコン川を下って分かった。水が生活に結びついているとね。だからすべての基盤を水にしたんだ。水こそ万物の源という世界観で。水と龍を描いた」と述べている。プロ

3) プロデューサーのオスナット・シューラー (Osnat Shurer) によれば、ディズニーのストーリー・トラストでは監督や脚本家がいずれも助け合っており、その協力関係が広がって東南アジア・ストーリー・トラストができたという。東南アジア文化の専門家として、文化人類学者や言語学者、考古学者、建築家、美術館キュレーターなどが加わっており、東南アジアにルーツを持つスタッフも東南アジア・ストーリー・トラストに加わっている。ラーヤのストーリー主任はタイのチョンブリー県出身であるファウン・ヴェラサンソン (Fawn Veerasunthorn)。

4) 東宝発行の映画パンフレットによれば、フィルムメーカーを2グループに分けてラオス、インドネシア、タイ、ベトナム、カンボジア、マレーシア、シンガポールを含む東南アジア中をリサーチ旅行したとのこと。しかしながら、Blu-rayで映像が出たのはインドネシアのバリ、カンボジアのシェムリアップ、ラオスのルアンパバーン3か所のみ。

デューサーのオスナット・シューラー (Osnat Shurer) は「龍の姿も地域ごとに違う。それをクマンドラに反映した⁵⁾」と述べており、その発言の際に映し出されていた映像では、スタッフがラオスのルアンパバーンの寺院にてナーガをスケッチしている姿がみられた。

当然、映画の中にはメコン川流域国だけではない東南アジア各国の文化的要素が散りばめられている。東南アジア・ストーリー・トラストの一員であったラオス系アメリカ人で文化人類学者のスティーブ・アールンサック (Steve Arounsack) も「クマンドラを造るにあたり、東南アジア各国のすべての文化に敬意を払いたかった」と述べている通り、東南アジア各国の人たちが映画を観た際に自分自身とどこかしら繋がりを有するように制作チームが様々な工夫を凝らし、各国の要素を取り入れている様子が窺える。

映画の制作時期をBlu-rayのボーナス・コンテンツやWeb上の記事などから推測すると、明確な時期は示せないまでも、脚本に基づくストーリーボードの制作が1年半から2年とされており、その打ち合わせが2019年8月6日と示されていることから、早くも2017年の後半、遅くとも2018年初頭にはすでに制作が始まっていたと考えられ、上述したように映画『メコン2030』と同様、メコン川流域国に対するアメリカ政府の政策と奇妙な関連性が見えてくるのである。

ディズニーの長編アニメ映画において、1995年にネイティブアメリカンのヒロインをすえた『ポカホンタス』が製作されて以降、西洋由来の白人ではないヒロインもしくはプリンセスを主人公とした『ムーラン』(1998 中国)、『プリンセスと魔法のキス』(2009 アフリカ系アメリカ人)、『モアナと伝説の海』(2016 オセアニア) が製作されてきた経緯を考えれば、このタイミングで東南アジアが次の舞台として選ばれても極端に違和感があるわけではない。しかしながら、当初予定されていた公開時期やアメリカの政策との関連性を考えた時、本作品は果たして最初から東南アジア全域を対象としていたのか、それともメコン川流域国ありきで、それを覆い隠す東南アジア全域

5) 実際にシースーに代表される作品中の龍はインド由来のナーガのようでありながら、四足を持つ中国由来の龍のようでもある。ナーガはどちらかといえば水底に棲むとされ、空をとぶイメージはないが、中国由来の龍は平素は水中にひそむ一方、時がいたれば水を離れて天に昇ることができるという性質を持っている。作中の龍はまさにインド由来のナーガと中国由来の龍をかけ合わせた存在といえる。

が必要だったのかという疑問が浮かんでくる。作品内で象徴的に表されるクマンドラを示す挨拶(両手で胸の高さに丸を作る)、シスーなどの龍に対して崇拜の態度を示す印(両手で頭の高さに丸を作る)においても、メコン川流域の上座仏教圏の日常的な挨拶の形と重要な祈りの動作にそれぞれが重なるため、やはりメコン川流域国がそもそもの想定であったのではないか、との思いが消し難く残るのである。

クマンドラという国名、 ハート国(龍の心臓)から導かれる要素

クマンドラを考えるにあたり、主人公ラーヤの国ハートが重要な鍵となってくる。ハートはかつての理想郷クマンドラを貫く川に浮かぶ島であり、邪悪な怪物ドルーンを封じ込め、人々を救った龍シスーの魔力が宿る玉を代々守護してきた国である。その水色に輝く玉が祀られている聖域は、カンボジアを代表するアンコール遺跡によく見られるリングムとヨニの造形そのものである。ラーヤが足を踏み入れる聖域の階段には水が流れ、その階段を上った場所には清らかな水と共に無数の石があり、その中央に龍シスーの玉が祀られている。映画の中でもこの場所は様々な角度から映し出されており、その全体はリングムとヨニの造形を忠実に表しているかのようである。

また、ラーヤの父親であるハート国の首長ベンジャが、分裂した国々の人々をハート国へ招き入れるために作った橋(参道)もアンコール遺跡を象徴するナーガの造形をあしらっているため、ハート国の重要な造形すべてがアンコール遺跡を想起させる。そうした要素からクマンドラという名前を考察してみると、9世紀から1432年まで栄えた古代クメール王国、アンコール朝を築き上げたクメール民族、すなわちカンボジア語で「クマエ」の存在が見えてくる。古代クメール王国が現在のメコン川流域国をすっぽりと覆うインドシナ半島を席卷する大帝国であったことを考えても、クマンドラがかつては一つの国であったというコンセプトを支える中心的存在と言えるのではないだろうか。そのため、分裂後の5つの国の中でも龍の心臓、すなわち命、中心を表すハート国にクメール、カンボジアのイメージを多く重ねてい

るように思われる。

しかしながら、クマエだけではクマンドラのクマの2文字しか重なっていない。そこでもう一つ根拠となり得るのは後半の「ンドラ」の音に通じる、武勇神かつ雷霆神であるインドラ神の存在である。現存する最古のインド語文献『リグ・ヴェーダ』には、インドラについての様々な神話が語られるが、彼が蛇の姿をとる悪魔ヴリトラを退治し、人間界に再び水と光をもたらす話は特に好まれ繰り返し讃嘆されている[仏教・インド思想辞典:26]。また、古代インド叙事詩『マハーバーラタ』においては、雨の神パルジャニヤと同一視されて雨神とみなされ、ひいては豊穡神、農耕神として崇められた一面を持つ[前掲:26、世界人名大辞典:パルジャニヤ]。カンボジア古典文学にも登場する神である[世界文学大事典:カンボジア文学]。インドラ神が水、光、雨と重なる神であることを考えると、クマンドラの「ンドラ」はインドラ神からきているようにも思われるが、インドラ神のもっとも好まれる神話において、蛇を悪魔と重ね、退治される対象としている点は、メコン川流域国の龍・ナーガが時に蛇と同一視される文化背景において齟齬が見られる。

そこで本稿では、インド中世の女性原理である性^{せい}力を教義の中心とする諸宗派の聖典の総称「タントラ^{りき}」との近似性を考えてみたい。タントラの教えには様々あるが、その中でも注目されるのは、宇宙のいっさいを発動せしめる根源的な女性原理である性力シャクティである。ヒンドゥー教において、シャクティとは世界を創造し維持する最高神の、活動的な力ないし、最高神の持つ女性的な力能を意味し[仏教・インド思想辞典:188]、そのシャクティはインド由来のヨーガにおいて人体の脊柱の最下部、会陰のあたりにあるムーラーダーラと呼ばれるチャクラの直下にあり、3周半のとぐろを巻く蛇の形をしたクンドリニーとして潜んでいるとされる[世界大百科事典:タントラ]。ヨーガを修すると、この蛇は脊椎中のスシュムナー管を伝って上昇、5つのチャクラ⁶⁾を経

6) 5つのチャクラの中心にハート(心臓)のチャクラであるアナーハタチャクラがある。各チャクラには要素ごとにエネルギーの色があるとされており、アナーハタチャクラの色はグリーンやエメラルドグリーンとされている。ハート国の色がブルーもしくはエメラルドグリーンを基調としている点にも関係性がみえる。映画ポスターの題字の色もグリーンである。また、シャクティが潜むムーラーダーラとシヴァとつながる入口でア

て頭頂のサハスラーラに至り、シバ神と合一するとされる。アンコール朝の基盤となるヒンドゥー教由来の水の神ナーガは、蛇もしくはコブラの事であることを考えると、水・龍・5・女性性というのがクマンドラ全体を包むコンセプトにも繋がってくる。

特にハート国の女性性を考えてみると、ラーヤには父親はいるが、母親はいない。なぜ母の存在が全く描かれていないのか、映画の中では全く語られていないものの、ハート国を代表するしづく型で中央に穴が開いたその土地⁷⁾も見方によってはヨニ、すなわちハート国そのものが女性性を表しているため、母の存在を消していると理解することができるかもしれない。また、ラーヤの相棒となる龍シスーが女性であり、映画のクライマックスで死んだと見られるシスーが水底から空へと甦る際には、上述したクンダリニーが脊柱の中を走るスシュムナーを通して上昇する様を模したかのように描かれていることも示唆的である。クマンドラを流れる川がメコン川を想定していると考えれば、メコン川もまた母なる川であり、女性性を包摂していると言える。その川を中心・心臓部に当たり、龍シスーの玉を代々守ってきたハート国に幾層にもわたる女性性がみてとれることが、クマンドラという名の後半部を象徴的に示しているとは言えないだろうか。

さらに女性性と中心について考えてみると、現在のメコン川地域5か国のうちベトナムを除く4か国が信仰する上座仏教の文脈においては、龍の玉が割れたのち、ハート国が所有した欠片にも意味があるように思えてくる。ハート国の欠片にはシスーの妹であるアンバの魔力が宿っており、それが「光る」魔力となっている。上座仏教国においては、末娘が家を継ぎ、親の面倒を見る風習が関係しているのか、末娘が困難な状況を克服し、人々を救済する物語が数多く存在する。その末娘とされるアンバの力が宿る欠片をハート国が持ち、一見すると役に立ちそうもない「光る」という魔力を持っている。しかしそれは、映画に通底するテーマ「互いに信頼しあう」ことへの

ある頭頂サハスラーラを合わせるとチャクラは7つとも考えられており、すべての色を合わせると七色の虹のような色になる。最後に甦る龍たちの色が七色に見えるのもクマンドラのコンセプトを支える要素になっていると考えられる。

7) インドネシアのバリ島付近にあるバナクリフ (Banah Cliff) に形状が似ている。

希望を指し示す光と捉えることができ、実用性はなくとも一番重要かつ物語を引っ張る核となる魔力と理解することもできるのである⁸⁾。

このほか、ハート国がカンボジア、クメールを想起させる要素が2つある。

1つ目は、カンボジアの古典舞踊の演目「モニーメカラー(賢いメカラー)」で踊り手が着用する水色の衣装と、その際に使われるきらきら輝く玉(カエウ・モニー・トゥップ: 不思議な力を持つ玉)がハート国で守られていた龍の玉のイメージに酷似している点である。演目における玉が雨を降らせる役割をもつことから、メカラーは水の女神とされており、豊作を願う雨乞いの踊りとして王宮で踊られてきた。こうした文脈も龍の玉に通じる点と言える⁹⁾。中国由来の龍も摩尼(まに)とよばれる竜王の脳中から出たとされる宝珠で、願うことはなんでも叶えられる玉を持っていることもあるため、カンボジア古典舞踊で使われる玉だけに類似しているとは言えないが、中国由来の龍の玉は多くの場合、水色ではなく金色で描かれ、玉そのものは雨や水の意味を持たないことから、カンボジアの古典舞踊における玉のイメージの方が中国由来の龍が持つ摩尼よりも強く想起される。

2つ目は、実際のラーヤの格闘スタイルとしては採用されなかったカンボジアの伝統武術ボカタオ(Bokator)とそのカンボジア女性格闘家タロアット・オム・ソム(Tharoth Oum Sam)の存在である。ラーヤの実際の格闘スタイルにはBlu-rayボーナス・トラックの「華麗なるアクション・シーン」で解説されているように、インドネシアやマレーシアの武術であるブンチャック・シラット(Pencak Silat)ならびにフィリピン武術のカリ&アーニス(Kali & Arnis)が採用されているが、カンボジア武術のボカタオも採用が検討されていたようである。ラーヤのアニメーターの一人、アレン・オステガー(Allen Ostergar)がタロアットを2019年1月頃にスケッチしており、彼女のファンの間ではラーヤの顔が彼女にとっても似ていると話題になっていたほどである。似ている似

8) インドラ神も光をもたらした神であるため、ハート国の欠片に光る魔力が込められていた点はインドラ神に繋がる要素かもしれない。しかし、インドラ神は男性神であるため、末娘であるアンバの魔力という文脈においては関連性を見出すことができない。

9) モニーメカラーについては、カンボジア専門家F氏のご教授による。

ていないという点に関しては主観的な問題なので想像の域を出ないが、ハート国ならびに主人公ラーヤにカンボジアのイメージを重ねすぎると、特定の国を想定させないストーリーコンセプトから逸脱してしまうため、格闘スタイルならびに主要な武器となる剣クリス (Kris) は意図的に大陸部ではなく島嶼部に寄せたのではないだろうか¹⁰⁾。

以上の点を総合すると、クマンドラの名前とそのコンセプトは、カンボジア、すなわちクメールのクマエと女性性に通じるタントラの組み合わせによって造られたのではないかと推察することができる。

ハート以外の4か国 ——テール、タロン、スパイン、ファング

ここからは映画のストーリー展開に沿って各国の特徴を読み解きつつ、メコン川流域国との関連を見ていきたい。

テール国 (龍の尾)

龍の玉が割れ、ドルーンが復活してから6年後、最後の龍であるシスーが下流のどこかで生きていたとの伝説を信じるラーヤが残る最後の支流を訪ねてテール国にやってくる。テールは名の通り、水源からもっとも遠い最下流に位置しているため、水位の減少で国々が互いに敵対的になるにつれて、さらに孤立した存在となっている。その地でラーヤはシスーを呼び起こすことに成功する。しかしながら、シスーを呼び起こしただけでは世界を元に戻すことはできないと知ったラーヤは、龍の玉の欠片すべてを揃えるために動き出す。テール国で手に入れた欠片にはシスーの姉プラニーの魔力が宿っており、その姿を自在に変える魔力によってシスーは人間の女性へと変身する。テール国までラーヤを追ってきた敵対するファング国のナマリーから逃げるラーヤとシスーは、ゴーストタウンとなりつつあるかつての港町でエビ料理を提供するレストランを営むブーン¹¹⁾と出会う。

10) 主人公ラーヤの名前もマレー/インドネシア語に由来しており、「偉大な」との意味を持つと東南アジア・ストーリー・トラスの言語学者ジュリアナ・ウィジャヤ (Juliana Vijaya) は「クマンドラを造る」内で述べている。

11) 正確には短音ブンだと思われるが、ラオス語では徳、運命、祝祭などの意を持つ。

メコン川流域国との関連を考察してみると、砂漠化した土地はどの国にも当てはまらないものの、川の最下流であること、ブーンのエビ獲りボートのエビの存在感が大きい点を考えると、エビが主要な水産輸出品目であり、かつメコン川最下流域のベトナムと言えそうである。仮にそうだとすると、現在のメコン川問題を放置すれば、ベトナム下流域は近い将来干上がるとの意味になるのだろうか。

テール国が姉プラニーの欠片を保有し、プラニーが姿形を自在に変える魔力を持っていたことがこの地との関連において何らかの意味を持つのか明確ではないものの、ひとつ考えることは、この映画においてメコン川流域が共有するナーガ信仰をテーマとしている場合、ベトナムの龍だけが他の国々において信仰されるナーガと姿形が異なる点にある。シスーが悪目立ちしないように人間に変身したのは、その世界に違和感のない存在となり、入り込んでいくことを意図しているのかもしれない。

また、テール国の「尾」をラオス語の表現と関連づけて考えてみると、興味深い読み解きもできそうである。「尻尾を切る」は縁を切ることを意味している。その表現を逆手にとれば、テール国で主人公ラーヤはシスーとの縁、ならびにラストシーンに向けて重要なメンバーとなっていくブーンとの縁を繋いだ、という文脈にも読めるのである。

タロン国 (龍の爪)

ブーンのボートにて一行はタロンに到着する。タロンの港町は、かつて5つの土地すべての貿易業者が行き交う賑やかな市場であったが、ドルーンの復活と水位の減少により打撃を受けている。しかしながらドルーンが水に近寄れないことをうまく利用し、水上に家や市場を建て、活気を保っている場所でもある。ラーヤは、シスーをボートに残してタロンにある龍の玉の欠片を奪いに首長の城へ向かう。その途中、迷子を装う赤ん坊ノイ¹²⁾に遭遇し、助けようとしたところ、逆にその仲間であるオング (猿) たちにラーヤが持つ欠片を盗まれてしまう。タロンは詐欺や窃盗が横行する場所と認識されており、ラーヤもその洗礼を受ける。その一方、ボートに残されたシスーは首長に贈り物を持っていけば争わずに欠片を

12) ノイはラオス語、タイ語で小さい、子供、末っ子などの意。

渡してもらえると信じ、ブーンから教えてもらったつけ払い(信用による後払い)を利用してあれこれ贈り物を購入する。その様子をみた商人たちはシスーに対し「私たちはあなたを知らない」、「信用できない。いま払って」と迫る。そこに現れた老女にシスーは助けられるが、その老女こそがタロンの欠片を持つ真の首長であり、ラーヤたちが持つ残りの欠片を奪おうとシスーをドルーンの森に閉じ込めようとする悪人だった。間一髪、欠片をオンギたちから取り戻したラーヤがシスーを助けるとともに老女から欠片を奪うことに成功する。

タロン国は多くの人物が行き交う港町として描かれており、東南アジア各国の様々な要素を見つけ出すことが可能な場所ともいえる。その中でも、メコン川流域国を考えると、タロンはタイの水上マーケットやベトナムのホイアンを連想させ、この2か国が入り混じった形で描かれているように見える。女兒ノイや首長の老女に騙される姿は、ベトナム戦争時に一般的には非戦闘員としてみなされた子供・女性・老人が実は戦闘員であったというアメリカ軍の痛い教訓が深層に埋め込まれているとは読めないだろうか。

タロン国で手に入れた欠片には、シスーの弟ジャガンの魔力が宿っており、あたり一面を霧で覆って目隠しをすることができる。物理的に霧を用いて敵の目から逃れることもできるが、それとは別に猜疑心は目を曇らせる、もしくは見た目でも容易く信用すると真の姿を見誤るといった教訓のようにも読み解けそうである。シスーがつけ払い(信用払い)を試みた結果、信用されなかった場面やラーヤやシスーが女兒や老女に騙される場面にそうした意図を読むことができ、タロンにおいては相手が信用に足る存在であるのかを窺う様子が全体を覆っている。

タロンが意味する爪を用いたラオス語の表現に「虎は爪を覆い隠している」というものがあり、日本語の「脳ある鷹は爪を隠す」と類似の意味を持っている。能力の高い者たちが相手の出方を観察しつつ、相手を信用しても良い存在なのか、それとも食うべき存在なのかをじっと窺う意味合いを持っているようである。縁あって一つのボートに乗るラーヤ、シスー、ブーン、ノイ、オンギたちもタロンの段階では真に信頼しあっているとは言い難い。これらの点からメコ

ン川問題におけるタイとベトナムの關係に関連づけて考えると、互いに協力できる相手だと潜在的には思うものの、互いの出方を窺っており、全面的な協力体制を構築する段階にまでは至っていないとも読めてくる。

スパイン国(龍の背骨)

雪に覆われた最もへんぴな土地に位置しており、他の国と交流するより孤立を好む荒々しい戦士たちが住むとされる国。竹で組まれた城壁が来るものを拒むかのように聳え立っている。タロンで老女にこっぴどく裏切られたシスーは落ち込みながらも、ラーヤに対して人を信じるのが大切だと説き、再び贈り物にお粥鍋を持って一人スパイン国に乗り込もうとするが、追いかけてきたラーヤと共に城壁前で罠にかかり捕まってしまう。いかつい風貌のスパイン国の男性住民トーン¹³⁾は捕えたラーヤとシスーを吊るし、脅すものの、住民は彼を残して誰も残っておらず、戦う気力もない彼はラーヤたちを助けに乗り込んできたブーンやノイたちにあっけなく縛り上げられてしまう。そこへナマーリがファンクの軍を率いてラーヤを差し出せと乗り込んでくる。ラーヤがナマーリのひきつけ役として戦っている間に他のメンバーたちは裏から逃げる算段だったが、ラーヤの戦局が悪いのを見たシスーは龍へと姿を変え、霧をつかって敵を蹴散らす。龍を目の当たりにしたナマーリが呆然と立ち尽くす間にラーヤたちはボートへと逃げていく。シスーが龍であったことを知ったブーンやノイ、オンギ、トーンはドルーンによって石になった家族を取り戻すべく、ラーヤやシスーと協力して戦うことを決意する。そしてトーンが持つスパイン国の欠片をシスーに差し出すと、シスーの兄ベンダーの魔力によってシスーは雨を降らし、天へと駆け上がっていく。

メコン川流域国を考えた時、スパイン国が最も想定している国を読み取りにくい国といえる。へんぴな土地、竹、人が極端にいない、ほぼ何も反抗せずに欠片を差し出している、最初にハート国に集められた際に象に似た生物を数匹連れていた、こうした点を総合的に考えるとラオスを想定しているようにも思える。

13) トーンはラオス語で金、銅、金属などの意。

スパイン国が保有していたシスーの兄ペンゲーの力を宿した欠片は最も大きく、ドルーンが嫌う水すなわち雨を降らせる力を持っている。ドルーンの一時的な退治、川の水位の復活はこれにより達成することができるが、石になった人も龍もこれだけでは元に戻すことはできない。目前の喫緊の課題は解決できても真の幸福や充足はもたらされないとの意味を考えると、『メコン2030』の論考[橋本 2021]で読み解いたラオス国内のダム問題を解決できたとしても、メコン川が抱える全面的な解決には至らないとの示唆を与えているようである。

スパインが意味する背骨を含むラオス語の表現に「背中を折る」という「裏切り」を意味する表現がある。厳密には背骨ではないものの、背中を折る意味を考えれば、背骨を折られることを示していると考えられる。そして、その表現を逆に考えれば、背骨を守ることは結束を固める、信頼し協力し合うとの意味にも取ることができる。タロンを経てスパインにてボートを共にするメンバーが一つになり、協力し合う体制を築き上げていく場面に合致しているとも言える。

ファンク国(龍の牙)

5つの国にまたがって流れる龍の川の源流に造られた人口の島。クマンドラの時代には陸と繋がっていたものの、ドルーンが復活してのち、自国をドルーンの脅威から守るために国の周囲に運河を掘り、陸から離れた島となった。龍の玉が割れてから他国では水位が減り国が衰退していったものの、上流に位置するファンク国は水に恵まれ繁栄している。幼少のラーヤを騙して龍の玉をファンク国に奪おうと試みたナマーリの母であるファンク国の首長ヴィラーナは、ファンク国の民を守る慈悲深さを見せるものの、他国に対しては冷徹な現実主義的一面を持っている。娘ナマーリはその母を敬愛しているものの、龍シスーに対しても強い憧憬の念を抱いている。

シスーを除くラーヤ一行はファンク国は裏切り者¹⁴⁾であると認識しているため、交渉する余地なしと考えていたが、シスーの説得に応じてラーヤは幼少期にナマーリから贈られた龍のネックレスをナ

14) 興味深いことに英語の表現ではあるが、映画内でファンク国もしくはナマーリのことを裏切り者として表現する際、got kicked in the backやstabbing of backsと背中を中心とした表現になっている。

マーリに贈り返す。受け取ったナマーリはラーヤの求めに応じてファンク国が保有する龍の欠片を持ち出し、ラーヤとシスーたちが待つ場所へ現れた。しかしながら、和解しかけた瞬間、クロスボーをシスーに向け「残りの欠片とシスーをもらっていく」と態度を翻す。シスーはそれでもナマーリを信じようとしたが、最後の最後でナマーリを信じきれずに手を出したラーヤによって、手元が狂ったナマーリのクロスボーから矢が放たれ、シスーの心臓に突き刺さる。そしてシスーは水中へと落ちていく。最後の龍を失った世界からは水が勢いよく消えていき、ドルーンが至る所に出現する。シスーを失い怒りに駆られたラーヤと石になった母を目前に怒りに震えるナマーリはファンク国の宮廷内で死闘を繰り返す。しかし、互いの死闘が何も生み出さず、何も救済しないことに気づいたラーヤは最後の最後にナマーリを信じる一歩を踏み出す。ナマーリの手によって5つの欠片が1つとなり龍の玉が甦ると、ドルーンは消滅し、石にされた龍たちも人々も元の姿に戻っていく。龍が世界に戻ったことにより、豊かな水が溢れ、かつての理想郷クマンドラが復活する。

ファンク国を構成する要素にはタイの要素が多く見られることから、メコン川流域国を関連づけて考えるのであれば、タイを想定した国と言える。一番象徴的なのは、ナマーリの格闘スタイルと武器である。格闘スタイルはタイの武術ムエタイを採用しており、武器もタイのクラビー・クラボーン(クラーブ)の剣を採用している。ファンク国の宮廷内の王座やファンク国が所有する船のデザインもタイの王室を彷彿とさせる。ファンク国を特徴づける猫のサーロットも、タイといえばシャム猫とのイメージを重ねているかのようである。また、ナマーリに龍のネックレスを届けるノイとオンギたちがファンク国に忍び込んだ際、見張りに見つからないように壁のモチーフになり切るシーンがあるが、それもタイでよく目にする夜叉のポーズであり、そうした細かい要素もタイを印象付けているように思う。

ハート国と対照的にファンク国に父の存在が全く描かれていないのは、牙に象徴される力や権力を男性性と捉えるからだろうか¹⁵⁾。プロデューサーのオ

15) ラオス語に牙を使う表現は見当たらないものの、岡田知子氏のご教授によれば、カンボジア語の表現では「牙を折る」で「力、権力、威力を取ってしまう」との意味になることから。

スナット・シューラーもファンク国のデザインにおいては「パワーがすべてなので、建造物もパワフルで特大です」と述べており、その特大の建造物はハート国でみてきたリングムとヨニの組み合わせにおいて、まさにリングムを象徴しているかのようなものである。

ファンク国が所有していた龍の玉の欠片が残すところのような魔力を宿していたのか、一度もシスーの手に渡っていないため描かれていないが、すでに兄弟姉妹の魔力が出尽くしていることから、最後残すところはシスーの魔力であったと考えられる。シスーは速く泳ぐ能力しかないと言っていたが、映画を通して際立っているのは最後まで相手を信じる力であった。映画の最後においてナマーリが初めてラーヤを信じ、ファンク国の欠片を他と合体させることで世界を救っている点を見ても、最後の鍵がシスーに象徴される信頼であったことが分かる。シスーを媒介としてハートとファンクが結ばれていく様子は、リングムとヨギの合体により豊穡がもたらされるという世界観とも合致している。

ファンク国をタイと想定すると、カンボジアが想定されるハート国やラオスが想定されるスパイン国との歴史的な確執も理解されるものの、昨今この地域が直面しているメコン川流域問題における関係性を考えた時には少々釈然としない部分が残る。この点においては、ナマーリがスパインでシスーと出会った後、ファンク国で母ヴィラーナと交わす以下の会話に別の存在を読み解くことができるかもしれない。

娘：お母様、信じられないものを見ました。

母：龍を見たんでしょ。龍の玉の欠片を持ち帰らなかったとアティタヤ将軍から聞きました。

娘：あれはシスーでした。私たちが壊した世界を直し、みんなを甦らせてくれます。

母：そのことが一番心配なの。甦った人々はきっとファンクに攻め入るでしょう。彼らはファンクがああ悲劇を招いたと思っている。

娘：そんな。みんなを傷つけるつもりはなかった。

母：そうよ。でも私たちがその龍とすべての欠片を手に入れれば、きっと許してもらえる。ファンクが世界を救う。それより何より私たちの民を守れる。

娘：ラーヤが簡単にシスーを渡すはずがない。

母：それでも渡してもらおう。

娘：どうするつもりですか？

母：あなたは心配しなくていいのよ。ご苦労様。

メコン川を共有する東南アジア5か国¹⁶⁾の上流には中国が位置し、メコン川の源流は中国にある。ファンク国の立地、水と命を守ってきた龍の玉を壊した元凶、自国の安全保障・利益追求に関しては冷徹な態度を示す首長、それらの要素が中国の存在を暗に導いているようである。地図に描かれる龍の川のデザインもナーガというよりは中国由来の龍に近似していることも示唆的である。

現在、カンボジアやラオスは中国と近い関係にあり、敵対してはいない。映画内の複雑な感情を内包する敵対関係を考えるにはファンク国をタイと考えると全体的に腑に落ちやすくなるものの、今日のメコン川問題という観点から考えてみると、ファンク国が中国であることを暗示しているようにも思える。ファンク国をタイとも中国とも読めるように設定している一つの理由には、クマンドラがかつて1つの国であったことが関係しているのではないだろうか。既に述べた通り、クマンドラにはかつてのクメール王国を重ねているような要素が見られるため、全ての問題を解決し、信頼と団結で甦らせた世界においては、もともと1つの国であったという背景が必要になる。そこに中国の存在が際立っては、その背景と齟齬をきたすため、それぞれの土地が歴史的ないがみ合いを超えて、メコン川という生態系を共有する地域として甦っていく道筋にはファンク国をタイとする必要があったのだろう。

ナマーリが一度は和解する態度を見せながら、シスーと残りの欠片を持ち去ろうとしたシーンにおいても、ファンク国が中国ではなくタイを想定している要素が見られる。そこには彼女自身が葛藤を抱えている姿が描かれており、「そうするしかない」と苦しそうに述べるナマーリには上座仏教国特有の親孝行を最高の価値とみなす態度を読み取ることができる。シスーを信じ、ラーヤたちと和解したい自分自

16) この映画においてはミャンマーの存在はほとんど感じられない。メコン川を共有しているとはいえ、ミャンマーにおけるメコン川の存在は他の4か国と比べると格段に小さいと言えるからではないだろうか。

身の本心を押し殺しても、母親を裏切る行為はできないと考えている姿がその様子をうき立たせている。しかしながら、中国の存在が暗示されていることも無視できないのである。

最後に窺えるアメリカの存在

中国の存在を無視できない理由には、この映画がアメリカ資本ディズニー製作の映画という点にある。上述したように、この映画制作のタイミングとメコン川流域国の描き方をみると、そこにはアメリカがこの地域における中国の力を弱め、アメリカの存在感を増していきたいと考えている政治的な思惑も透けて見える。上記のようにファンク国が中国でもあるとすれば、人々の心を一つにし、クマンドラを甦らせようとしたハート国に対してファンクは水と命を守ってきた龍の玉を壊し、人々の不和を増長させ、ドルーンを復活させた元凶である。そしてそのドルーンは人々の不和が生んだ疫病だとシスーは説明している。そうしたドルーンを最後にすべて消滅させ、この地域に信頼と結束を甦らせ、色とりどりの龍たちが天空をかける姿は、中国からメコン川を取り戻し救済したアメリカの姿と読むのは行き過ぎだろうか。

この穿った見方でもう一つ象徴的に見えてくるのは、映画の最後の最後に映し出されるディズニーの城の映像である。蛇行する大きな一本の川の真ん中にディズニーの城が聳え立ち、盛大な花火があがった後にディズニーの文字が現れる。ラーヤの作品のために作られた映像でないことは明らかだが、川の形状がメコン川に類似していることから、見方によっては、メコン川を救済し、最後にこの地に君臨するのはディズニー、アメリカであると象徴しているかのようである。

また、龍の玉がシスーを含む兄弟姉妹5神の力の結晶であること、壊れた玉を元に戻す役目を担うメンバーが一人を除きすべて子供であることにも、親の世代では乗り越えられなかった問題をディズニー映画観客層である次世代を担う子供たちこそが作り替えていくという次世代に向けたメッセージが内包されているのではないだろうか。

公開予定であった2020年は ベトナムとアメリカの国交正常化25周年

『ラーヤと龍の王国』は東南アジアにルーツをもつアメリカ在住もしくはアメリカ国籍をもつ人たちに概ね高い評価を受けている。特にベトナム戦争後の1975年¹⁷⁾から1986年頃までにインドシナ3国からアメリカへ難民・移民として渡った世代¹⁸⁾の子供たち、そのまた次の世代の子供たちにとって大きな意味を持つようである¹⁹⁾。脚本家の一人であるベトナム系アメリカ人キュー・グエンは「周りにはアジア人がいないアメリカの小さな町で育った僕にとっては、アジア系の外見で英語を話すヒーローがテレビに出ていなくて寂しかった。子供には同じ思いをさせたくなかった。この映画のおかげでうちの子はその寂しさを感じない。外見も中身も自分に近いヒーローがいる。若くて楽しくてユーモアがあって、自分を重ねたくなるようなヒーローだ」[Blu-ray ボーナス・トラック「ラーヤの世界を味わう」]、「東南アジアのバックグラウンドを持つアジア系アメリカ人の私にとって、この作品は、私の子供たちが観た時に、主人公の彼女も自分たちと同じような見た目で、自分たちの祖父母、叔母、叔父、そして父であるこの私と同じような見た目だと思えるような主人公を書ける機会となった。特に自尊心が築き上げられる発達期の年齢である子供たちにとって、それは人生にポジティブな影響をあたえるものだ」[パンフレット]と述べている。また、同じくベトナム系アメリカ人でラーヤの声を演じているケリー・マリー・トラン (Kelly Marie Tran) やノイの声を演じているタリア・トラン (Thalia Tran) も同様に、自分と同じ見た目の東南アジア出身の主人公がアメリカの主要映画会社であるディズニー作品に登場していることがとてもポジティブな体験を与えてくれていると述べている [Global press

17) ここでは1975年4月30日のサイゴン陥落、南ベトナム政府の無条件降伏後を指す。

18) この時期インドシナ3国からアメリカへ移住した人数は約80万人 [小野澤 2009]。

19) 2019年時点でアメリカのアジア系人口の内、中国系、インド系、フィリピン系、ベトナム系、韓国系、日系の6つの主要グループで全体の約85%を占めている。その中でも東南アジアのフィリピン系が18%、ベトナム系が9%となっており [JETRO 2021]、YouTubeなどでラーヤ作品のレビューを発信している人もフィリピン系、ベトナム系が多い印象を受ける。

conference of Raya and the Last Dragon hosted by Jeannie Mai]。

本作品に対して、せっかくのディズニー初東南アジア舞台の映画であるのに、声優に東南アジア出身の俳優がほとんど起用されておらず、多くが東アジア出身の俳優で占められている点を批判する意見がある [Silva 2021]。確かに名前を持つ登場人物を担当した俳優で東南アジア出身の両親を持つのは、すでにあげたケリーとタリア2名に加え、母親が東南アジア出身の俳優3名のみである。5名中3名がベトナム系、各1名ずつラオス系、マレー系、そして脚本家2名がベトナム系、マレー系となっている。こうしたキャストの配分をみると、アメリカ国内における東南アジア系の人口としては、フィリピン系がベトナム系より10%近く多いのにもかかわらず、全体的にベトナム系に偏重がみられることから、本作品はある意味ベトナム戦争後45周年、アメリカ・ベトナム国交正常化25周年を記念する映画とも言えるのではないだろうか。また、メコン川問題を考える時、最下流のベトナム・メコンデルタ地帯が水位の減少に伴う近年の影響を最も受けており、アメリカの介入を期待している様子が窺えることから、ベトナムの存在を他の東南アジア諸国に比べて際立たせたひとつの理由と見ることもできそうである。

最後に、映画全体を考えれば、取り上げて考察すべき要素はほかにもまだ多く残されていると思うが、本稿の考察においては、映画『メコン2030』との関係において重要と考えられる要素を中心に取り上げた。考察においては、『メコン2030』の読み解きを共におこなった研究会メンバーからの示唆・意見も大いに参考にさせて頂いている。

参考文献

※Web資料の最終閲覧日はすべて2022年1月6日。

Budiman, Abby and Ruiz, Neil G. 2021 “Key facts about Asian Americans, a diverse and growing population”(April 29,2021). Pew Research Center. <<https://www.pewresearch.org/fact-tank/2021/04/29/key-facts-about-asian-americans/>>

Chau, Hong. 2021. “Vietnam gains from rising US shrimp demand”(October 27,2021). VN Express International. <<https://e.vnexpress.net/news/business/industries/vietnam-gains-from-rising-us-shrimp-demand-4377813.html>> (上記の翻訳・編集・転載記事「ベトナムニュース【経済】2021年のエビの輸出総額目標を40億USDに設定」(2021.4.16) <<https://access-online.net/?p=4214>>)

橋本彩 2021「父の不在、母なるメコン、そして兄・弟・姉——アニサイ・ケオラ監督The Che Brotherをめぐって」山本博之編著『CIRAS Discussion Paper No.100 越境する災い——混成アジア映画研究2020』、京都大学東南アジア地域研究研究所。

早島鏡正監修、高崎直道編集代表 2013(1987)『仏教・インド思想辞典』春秋社。

日本貿易振興機構 (JETRO) 2021 「アジア系人口が2060年に4,620万人と予測、米シンクタンク調査」(2021年5月10日) <<https://www.jetro.go.jp/biznews/2021/05/1e17e4c94415015b.html>>

株式会社東宝ステラ編 2021 『ラーヤと龍の王国』パンフレット、東宝株式会社映像事業部。

小野澤正喜 2009 「グローバル化とアメリカ合衆国におけるアジア系民族集団の展開——タイ系民族集団の事例研究」『育英短期大学研究紀要』第26号。

Shepherd, Jack. 2021 “New Raya and the Last Dragon trailer finally reveals Awkwafina’s dragon”(January 26,2021). TOTAL FILM The Smarter Take on movies. <<https://www.gamesradar.com/new-ray-a-and-the-last-dragon-trailer-finally-reveals-awkwafinas-dragon/>>

Silva, Cynthia. 2021 “Disney’s ‘Raya and the Last Dragon’ sparks mixed reactions on Asian representation” (January 27, 2021). NBC news. <<https://www.nbcnews.com/news/asian-america/disney-s-raya-last-dragon-sparks-mixed-reactions-asian-representation-n1255698>>

Strangio, Sebastian. 2020 “‘How Meaningful in the New US-Mekong Partnership?’” (September 14, 2020). The Diplomat <<https://thediplomat.com/2020/09/how-meaningful-is-the-new-us-mekong-partnership/>>

ウォルト・ディズニー・ジャパン 2021 ボーナスポイント「ラーヤの世界を味わう」、「新しい制作スタイル」、「華麗なるアクション・シーン」、「クマンドラを造る」、「アフレコ現場の裏側」、ラーヤ・トリビア!」、「ストーリーボードで見る制作の流れ」、「未公開シーン」『ラーヤと龍の王国』Blu-ray Disc収録。

《Japan Knowledge Lib》

岩波書店辞典編集部 [編] 2013 「インドラ／パルジャーニヤ」『岩波 世界人名大辞典』岩波書店。

下中直人 (平凡社) [編著・発行] 2014 「アンコール朝／印相 (ムドラー)／クンダリニー／真言 (マントラ)／タントラ／ナーガ／ヤントラ／螺旋／竜」『改訂新版 世界大百科事典』平凡社。

『世界文学大事典』編集委員会 [編] 1996-1998 「カンボジア文学／マハーバーラタ／リグ・ヴェーダ」『デジタル版 集英社 世界文学大事典』集英社。

相賀徹夫 (小学館) [編著・出版] 1994 「インドラ／クメール」『日本大百科全書』小学館。

石田 瑞磨 1997 「如意宝珠／摩尼」『例文 仏教語大辞典』小学館。

《YouTube》

Global press conference of Raya and the Last Dragon hosted by Jeannie Mai.

“Raya And The Last Dragon Global Press Junket” uploaded by Amy Fulcher (2021/03/04). <<https://www.youtube.com/watch?v=Hi9w8EFsfB0>>

“Raya and the Last Dragon Review - A Mom Filmmaker Southeast Asian Perspective” by JoFilmMama (2021/03/15). <<https://www.youtube.com/watch?v=FKwtA-5JtWc>>

“Searching for Kumandra | Decoding the Cultures of Raya and the Last Dragon” by Philippe Lazaro (2021/03/30). <<https://www.youtube.com/watch?v=jVHp30b8hOo>>

“The Cultural Inspirations in Raya and the Last Dragon” by Mina Le (2021/03/26). <<https://www.youtube.com/watch?v=uaJfExPF9EA&t=871s>>